



自然採光に配慮した病棟

待望の”ホスピス”

函館おしま病院 道南圏の

医療法人敬仁会函館おしま病院（福徳雅章理事長・院長、間島敦子看護師長）が工事を進めていた待望の“ホスピス”病棟が完成し、運用を開始している。「癒し癒される心からの医療」を理念に地域社会に根差したホスピス医療の実践を目指すための“拠点”となる。「ホスピスとは主として末期がんの方が最後までその人らしく生き抜くことを支援するプログラムであり、その場所でもある」という考えを反映した施設整備は、それ自体これからの医療機関のあり方を示唆するものとなっている。

日本医療機能評価機構認定に続く朗報。希望実現に大きな一歩

今回の“ホスピス”病棟の竣工は、先に日本医療機能評価機構から受けた認定施設に続く朗報。平成14年春、新体制で病院の再スタートを切って以来の福徳理事長の希望である「道南圏の医療コミュニティーとしてホスピスの展開と活用」という希望の実現に大きく近づくものだ。

“ホスピス”病棟で目につくのが廊下の一角にコーブ式に設けられたキッチン。町並みと人の行き来を目にしながらかきながら食事づくりを楽しむことができる。また、1階は病室がなく、家族休憩室と家族風呂そしてキッチンが設けられている。全く、他者の眼を感じることなく家族水入らずの時間を過ごすことができるように配慮されている。自然光と柔らかな光りで包まれた構造



病棟の廊下にコーブ様にキッチンがつけられている。病室からは見えない設計。1階入口はホスピス病棟が地域とつながりというメッセージをはこぶ

病棟完成

医療コミュニティーを目指す



1階に設けられたホール。コンサートなど多目的利用ができる。手摺りで別空間にされた暖炉コーナーも設けられている

だからゆったりとした雰囲気の中で時を過ごすことができる。カウンターもなくしてしまったナースステーションは患者との癒し空間の共有を意図している。

早期にホスピス20床の開設を目指す

むろん全室、個室。特別室はゆったりとした空間が広がる。パイピングは、ふだんは目につかないようブラインドできる。治療色をなるべく排しながら、末期の呼吸管理を希望される場合の対応も可能なようにしている。1階にはコンサートや家族や地域住民と楽しい一時を過ごすことにも利用できるホールが設けられた。手摺りを挟んで暖炉スペースが設けられた。広い空間と小空間の組み合わせに社会とのつながりと個人への眼差しを大切にす福徳理事長らの息遣いが伝わってくる。嬉しいことに福徳理事長が以前勤務していたホスピス施設から堺千代看護主任や鶴田純子さんが参加するなど看護スタッフがそろってきた。「早期にホスピス20床の開設を目指したい」という福徳理事長と間島看護師長の声のハズみを感じたのは気のせいだろうか。



福徳雅章医療法人敬仁会 函館おしま病院理事長・院長



左から間島敦子看護師長と堺千代主任



患者・家族のニーズに対応して特別室を設けた。パイピング関係は一カ所に集約するとともにブラインドできる



トイレはドアをあけると自動的に照明がつく。シャワーをトイレ内につけ尿器を洗浄できるようなしつと配慮した。



医療法人敬仁会
函館おしま病院

“癒し癒される心からの医療”

函館市市場町19番6号
TEL0138-56-2308 FAX0138-56-2316
URL <http://www9.plala.or.jp/OSHIMA>